

ゴードンからの贈り物

臼杵有光

A Gift from the Gordon

Arimitsu Usuki

1999年6月13日から18日までGordon Research Conferenceが開催され講演のためアメリカへ出張した。名誉ある会議とは思って見なかったので、意気揚々と出張した。ここではその出張にまつわる話を書いてみたい。

1. Gordon Research Conferenceとは

Gordon Research Conference (GRC) はジョンズ・ホプキンス大学のGordon教授の提案により、1931年に開始された歴史のある会合である。最初は1つのセッションであった会議も今では100を越えるまでに至り、大変権威のあるものに成長している。1999年度は172セッション、2000年は149セッションが計画されている (<http://www.grc.uri.edu> でテーマは閲覧可能)。

GRCの精神は“Frontiers of Science”，つまり共通の科学・学術的関心を持つ科学者が一同に集まり、自由に討論し、最新のアイデアを交換するこ

とにより、科学の発展に寄与する場を提供することである。

そのために、世界から第1線の科学者が集まり、起居を共にして、十分に時間をかけて意見の交換が行われる。また最新のデータが出しやすい様に、“Off the Record”である。つまり講演の予稿集やアブストラクトが一切ない。ましてや、写真撮影、録音、記録は許されない。また商売（宣伝）も禁止とのことである。この話を現地へ行ってからチェアマンに聞いて、OHPシートの右下にある中研ロゴを心配したが、あの程度なら良いと言われそのまま使用できた（実際ダメと言われたらどうして良いかわからなかった）。

2. GRCの運営

会議の運営、講演者や参加者の選定、会議の進行はすべてチェアマンの一存に委ねられている。午前の会議は9:00に始まり、12:00で終了。午後は17:00迄はフリーであり、夕方再び19:30から



写真1 Gordonの看板

大学の正門前に小さな看板が立ててあった。正式なものはこれだけ。



写真2 Gordonの看板

建物の前には受付の案内があったが、皆さん迷っていた。

22:00まで会議が行われる。昼食後17:00までは、いたるところでディスカッションの輪ができていく。最初は参加したが、正直なところ1週間も続くと、話題も尽きて外へ出かけようと言う事にもなった。慣れた人はテニスウェアや水着をちゃんと用意しており、休憩時間を有効に過ごしていたようである。私も1日だけテニスに参加させていただいた。

講演は、通常の学会であれば正装して参加するが、GRCではびっくりした事に、みなラフな格好で行っている。アメリカ人は半ズボンとTシャツがほとんどである。わたしは一応スーツを用意したが全く不要であり、アメリカ滞在中、鞆の中から出る事はなかった。発表は30分、質問が15分であり、質問者は必ず、所属と名前を名乗らなければならない。これも非常に活発であり、チェアマンが制止しないととても時間内には終了しない。チェアマンからは前日に呼ばれ、綿密な打合せを行ったが、そのセッションを何とか成功させ、活発な議論にしたいという姿勢は好感がもてた。

私が参加したZeolitic & Layered Materialsは1991年に始まり、1年おきに開催されて今年は5回目である。会場はいつもNew Hampshire州のPlymouth State Collegeである。周りは山に囲まれた何も無いところである。またGRCという名誉の会議を

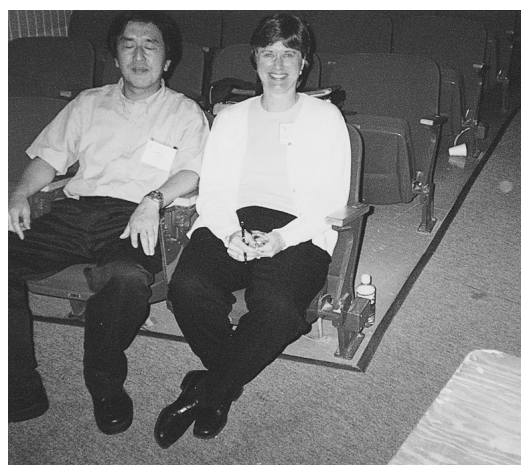


写真3 研究者とのディスカッション
右隣がアルゴンヌ国立研究所のDr. Kathleen Carrado

行っていると言う宣伝は一切無く、初日に写真のような看板が出ただけである。寝泊まりする場所は、いわゆる学生の寮であり、部屋には机とベッド（といってもパイプでできた壊れそうなもの）しかない。トイレは共用、風呂はなくシャワールームがあるだけである。このような場所に世界の1流研究者が寝泊まりしていると言うのは、部屋に居なくて、外へ出て議論するようにとの配慮？かあるいは名誉のために我慢しているとしか思えなかった。今回参加者は14ヶ国から128人であった。日本からは東工大の堂免教授と私の2人が招待講演を行った。4回目（1997年開催）に日本人で初めて早稲田大学の黒田教授が招待講演を行ったそうである。その他のポスターセッションでの参加者は、寺崎さん（東北大）、辰巳さん（横浜国大）、野村さん（東工大）、松川さん（早稲田大）、小川さん（早稲田大）、丹羽さん（鳥取大）であり、私以外はすべて大学の先生であった。招待講演は権威があり、他の先生からどのようにしたら招待されるのか聞かれたが、私自身もそれはよくわからないと答えておいた。

3. 講演

以下の内容で招待講演を行った。

タイトル：Synthesis of Polymer Clay Nanocomposites

内容：ポリマー中に層状珪酸塩を1枚ごとに均一に分散させたクレイハイブリッド材料を各ポリマー毎に異なる手法を用いる事により成功した。

発表は無事に30分で終了したが、終了と同時に10人ほどから手が挙がった。早口でほとんど内容が理解できない質問に関しては、事前にチェアマンに内容を紹介してあったために、かなりフォローしていただいた。

私のすぐ後に、アルゴンヌ国立研究所のDr. Kathleen Carrado（写真3）が同様の技術について講演を行ったが、豊田中研の技術にはとてもかなわれないが、最近我々もクレイハイブリッドの研究を行っているを紹介してくれたときは、大変名誉に感じた。

会議の最後に次のコンファレンスについて全員で協議があり、時期とChairmanとCo-chairman

を選出した。Chairmanは自動的に今回のCo-chairmanが昇格するので実際は、Co-chairmanを推薦と自薦で3名候補者を出し、全員で投票を行った。チェアマンが推薦した人が選ばれたが、2名が自薦で名乗りをあげるところがGRCの権威のある証拠だと思う。



写真 4 最後の食事会

左から堂免さん（東工大）、松川さん（早稲田大）、筆者、辰巳さん（横浜国大）、皆さんリラックスして、ロブスターを食べている。

すべての会議が終了した木曜日の夜のディナーは、大変豪勢であり、すべての人にロブスターがサービスされた。これはこの場所で行われるGRCの恒例行事のようであり、この日だけは日本人同士集合し、くつろぐ事ができた（写真4）。

企業の研究者として、ゴードンコンファレンスに参加でき、また材料のパイオニアとして紹介されたことは自分に自信をつける事ができた。

また、今回はほとんどが大学や国の研究機関の研究者であったが、大学でも基礎研究を重要視しながら、工業的に価値のある物を作っていこうとする研究姿勢が見られ、ますますきびしい競争時代になることを痛感した。

（1999年11月4日原稿受付）